中学生が主体的に学ぼうとする授業の構築
－OPPシートを活用した振り返り活動を通して－

学籍番号　２０９３２４
氏　　名　羽藤　江里
主指導教員　鈴木真由子
副指導教諭　水野　惠司

１．背景

中央教育審議会答申において、「生きる力」の育成のため、カリキュラム・マネジメントの視点として『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』が明記されている。また、文部科学省より、主体的な学びの視点として、「見通しをもって粘り強く取り組む力が身に付く授業」「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に生かす力を育む授業」の2点が挙げられている。さらに、ベネッセ教育総合研究所（2020）の調査より、中学生の「学習意欲の低下」と「学力差」は、解決すべき喫緊の課題であった。

以上のことを踏まえ、「見通しを持つ」「学びを振り返る」という観点に着目しつつ、目指す資質・能力である「生きる力」を育ませるために、主体的な学びの実現を目指した授業改善の取り組みを通して、子どもたち主体性を高めていきたい。

本研究の目的は、子どもたちが学んだ内容を理解できるようになるとともに、見取りを通して適切な授業改善を行うといった過程の中で、「主体性」を高めることができるということを、実践を通して明らかにしていくことである。そこで、子どもたちに授業ごとのつながりを意識させ、各授業の学習目標を明確化させる振り返り活動を行う。この取り組みを通して、実習校でみられる生徒の学力差の解消に少しでも尽力できることを期待したい。

２．研究方法

対象は、大阪市立の中学校第 2 学年 5 クラスであり、第 1 学年時から関わっていたが、本研究テーマでは今年度から 2 単元分の授業にて実施した。主体的な学びの視点である「見通しを持つ」「学びを振り返る」ための手立てとして、本研究では一枚ポートフォリオ評価（One Page Portfolio Assessment）を一枚のシートにして単元を通して活用する OPP シートを用いることとする。検証授業前は、アンケートや OPP シートによる現状把握からの指導案作成、検証授業期間では、OPP シートの学習履歴の確認とコメントの記入、形成的評価による授業改善を行い、検証授業後は、OPP シートとアンケートによる分析と考察を行う。OPP シートは、「学習前・後の本質的な問い」、毎回の授業後に書く「学習履歴」、単元終了後の「学習後の自己評価」から、生徒の記述の変容を捉えるとともに、生徒自身が自己を振り返ることによって得られるメタ認知を育むことに生かす。また、アンケートは、浅海（1999）の主体性尺度を参考に作成したものを用いて、検証授業 1 の開始前と検証授業 2 の終了後とで実施したものを分析することを通して、授業による変容の有無を検討する。

３．研究成果・課題

3.1　本研究の成果

検証授業 1 では、生徒にとってはじめて OPP シートを使うため、あくまで振り返り活動を行う習慣づくりと OPP シートに書くことを目的に行った。友だちの学習履歴を授業の冒頭に共有し、毎回授業者がコメントを書いて返すことなどを通して、回を追うごとに文字数が増えたり、そのコメントに反応してくれたりする生徒がみられた。その点で、コミュニケーションの手段としても効果的であったといえる。

また、検証授業 2 では、生徒が記入した学習後の自己評価の内容について、単元を通して自己の成長を感じられている、単元を貫く問いについて自分の言葉でまとめられているなどといった記述がみられた。その結果、生徒の記述した学習履歴から、教師の意図していたことがどれくらい伝わったのかがすぐに確認でき、適切に授業改善に生かすことができた。これらのことから、授業ごとのつながりを意識させ、各授業の学習目標を明確化させる振り返り活動になっていたのではないかと考える。

生徒に行ったアンケートでは、自己決定力に関する項目の変容について有意差がみられ、他の項目とバランスよく主体性を育めたことがうかがえた。

これらのことから、生徒の記述の見取りを通して、適切な授業改善を行う過程の中で、「主体性」を高めることができたのではないかと推測される。

3.2　本研究の課題

本研究では、実習校の抱える課題である学力差について、個々の学習状況に合わせたアプローチを通して、一定の効果がみられることも期待していたが、その効果を実証できなかったことが課題として挙げられる。低学力層への対応については、2 単元の授業のみならず、長期にわたって、教材や授業の方法をさらに工夫して丁寧に進める必要があると考えられる。また、社会科のみならず他教科でも OPP シートを活用することで、効果がみられるのではないかと推測する。文部科学省においても、「個別最適な学び」が求められているが、2 つの側面のうち「学習の個性化」までは追求できていなかった。そのためには、授業時間以外での生徒との関わりをさらに増やし、関係性を構築したうえで取り組む必要があったと考える。

また、分析に関しては、OPP シートの分析の母数が少なかったこと、シートの記入に対して難易度が高く感じた生徒がみられたこと、教師にとっての OPP シートへコメントを書く負担の大きさなどといったいくつかの課題も見られた。実習校の実情に合わせて、研究の内容や手段を臨機応変に対応し、OPP シートの記入方法や目的をどの生徒にも分かりやすく伝わるような工夫が必要であった。

3.3　今後の展望

毎回自分の言葉で授業の要点を OPP シートにまとめるので、書く力や見方・考え方の力の育成にも役立ち、教科に関わらず活用できる成果も得られたと推測する。また、OPP シートの意義を実感することで、生徒の学ぶ意欲にも大きく変化を与えうることのほか、自己の再認識に結び付き、主体性だけでなく自己肯定感を高めることにも有効なのではないかと考える。研究という枠を超えて、日頃の授業でも生かせる教材や授業開発にこれからも寄与していきたい。